

「大原御幸」をめぐる一つの読み

——『閑居友』の視座から——

村上學

1 (村上)

『閑居友』が暗い題材を扱った説話集であることはよく知られているが、それが人間存在の暗闇を無意識に掘り起こしてしまっていることは意外に認識されていない。下巻末尾の跋文めいた記述によれば、編者慶政はこの説話集を高貴（おそらく人生経験の少ない深窓の女性かとも推測されている）^①の下命で献上すべく執筆はじめたが、「詞つたなく、心みじかきものゆへ」中斷したものの、催促を受けて、完成を約束した手前、再び筆を執ったという。上巻冒頭（第一「真如親王天竺に渡り給ふ事」と同末尾（第二「唐橋河原の女の屍の事」）ほかの評語部分の口吻にな

執筆者の屈折した心境が窺えることは諸氏の常に指摘するところ、その基底のトラウマの一つに上巻末尾の評語を導き出した説話として記している、主人と密通した十九歳の女が主人の女房になぶり殺しにされ、手足をもぎ取られて河原に棄てられた「大きなる木の端のやう」なる屍骸を見た幼時体験が据えられていることも周知のことである。

この説話集は上巻が男性説話であるのに対して下巻全十一話は女性が中心人物となっている。その第三話「恨み深き女、生きながら鬼になる事」は下巻説話の代表としてつとに有名である。中昔の美濃国のことである。ある人の娘が遠くから間をおいて通ってきた男に棄てられたと思い込み、それが態度に表れて、男に疎まれた。女は引き籠もりにな

つた揚句に失踪し、父母も亡くなつた。三十年ばかり経つて野中の破れ堂の中に鬼が栖み、幼い牧童を取つて喰らうという噂が立つた。里の者が堂に火を付けたところ、天井から「角五つある、赤き裳腰に巻きたるが、云ひ知らず氣疎げる」モノが走り降りて、村人に向かい「我はこれ、そこの何某の娘なり」と正体を明かす。女は男をとり殺した後、元の姿に戻れなくなつてこの堂に隠れたが、「生ける身のつたなさは、物の欲しさ堪へしのぶべくもなし。すべて辛かりけるわざにて、身の苦しみ云ひ述べがたし。夜昼は身の内の燃え焦がる、やうに覚えて、悔しくよしなきこと限りなし。」と告白する。そして済度のために法花経の一日頓写を頼んで「さめぐと泣きて」火の中へ飛び入つて焼死ぬ。

この説話は二重にやりきれない。一つは鬼になつたのは自ら「悔しき心」を起こして招いた結果だと明確に知り、心傷つき「さめぐ」と泣きながら、それから抜け出すことができず、悪行を重ねなければならないこの女の性。もう一つは、女の懇望にもかかわらず村人が法花経頓写をして済度したとは記していないことである。「孝養もしやしけん、それまでは語るとも覚えず侍りき」。慶政はこの女について「その人の行方、よも良くはべらじものを」と、

都からは遠い国の昔のこととして女にも村人にも感情移入せず、いかにも深窓の姫君に対する人生教訓にふさわしい平凡な批評しか記していない。しかし、彼はこの話の内に潜む人間存在の暗闇を無意識のうちに掘り起こしてしまい、いまこの説話を読むわれわれをして慄然とさせるのである。

この説話の中には『閑居友』下巻の多くに共通するモチーフがある。それは女性が人に見られたくない姿、嘗ての姿とはうつてかわった落魄の姿を見せざるを得なくなり、そのことによって心傷つく、しかもその傷心は自らの「思ひ取る」心が招いた結果である事を自らが知っているといふことである。第一話「揖津の國の山中の尼の発心の事」は夫の死後「世の中何にかはせん」と思い取つて財産も女盛りの身も棄て山中に草庵を作つて引きこもつた尼に編者が遇つた話である。「色も蒼み衰へて、よしあしも見えぬ程」の姿で、現在に至るまでの心境を語る尼は「心にはさまぐと思ひ入れたる様なるを、さすがに言に出でて數（く）には云はぬ」様に見えたと慶政は語る。一途に修行に励む姿が悟りきつた心のもとでではないことに注意されるのである。

第二話「室の君顕基に忘られて道心發す事」も同じモチーフを持つ。一旦は中納言顕基の寵を受けたが捨てられ

室の泊へ返された遊君が外出もせず念佛一途の生活を送つて生活に窮する。彼女は母親が死んで四十九日を控えた夕暮、入港してきた中納言の家臣の船にゆく。遊女が主人の愛人だった女と知り、「いかでか乗せ奉らん」と言う船の主に「知りたるなり。などてかは苦しかるべき」と乗り込む。女は翌朝金五十をもらい、髪を切つて置いて出てゆく。その日の仏事を済ませてそのまま出家遁世したという話である。この遊女ゆえのプライドにかかわったモチーフが祇王の物語と共通することは言うまでもない。違うところは主君の寵愛を受けていた嘗ての華やかな姿を知つてゐる家来に我から姿を見せて身を任せ、そのことによる傷心を世人に厭い「いみじく行」う心のしるべにしていることである。家来の話を聞いた顕基は「うるせき（人柄の良い）」女なりとして「おなじくは百取らせよ」と涙ぐんだという。そして慶政はその言の延長線上に立つて、この女が男に忘れられた恨みを「あじきなし、よしなし」と「ひたすら思ひ忘れて」遁世の中だちとしたことを称賛し、実はそれが優れた往生人顯基の仕向けた業だとするのである。評語とその陰にあるモチーフとの大きなズレ。そしてこれに先述の第三話が続くのである。これらに登場する女性の、嘗てとは対照的な姿の呈示を不淨觀の表現ととらえることは諸先

賢のなすところであるが、その深層のモチーフたる登場人物の心の傷については意外に言及する人がいない。

わたくしは『閑居友』を少し深読みしすぎているのかも知れない。ただこうした読みの上に立つて『平家物語』の大原御幸（それと密接な関係があるのが『閑居友』下巻第八話「建礼門女院の御庵に忍びの御幸の事」である）を中心とする一連の物語を読み直してみると、この研究業績の汗牛充棟もただならぬ個所に別の姿が見えてくることも否定できない。特に気になるのが、延慶本の女院往生の部分である。^⑤

廿六 女院ハ法皇還御之後、サスガ都ノミ恋ヶ被思食^テ、日來思食入サセ給タリツル寂光院ノ御スマヒモカレ^ヅニ思食ナリテ、何ナリケル御便ニカ有ケム、法性寺ナル所ニカスカナル御有様ニテ住マセ給ケル程ニ、承久三年後鳥羽院ノ御合戦ニ、都モ不闇、院ヲ始奉テ、御子ノ院々宮々モ、東夷ノ手ニ懸テ国々へ流サレサセ給ヲ聞食ニ付テモ、先帝ヲ奉始^テ、一門一々都ヲ落テ、西海ノ海上ニ漂テ、終ニ海底ニ沈給シ事共、只今ノ様ニ思食出サレテ、弥御歎ツキセズ。「何ナル罪ノ報ニテ、カ、ル憂世ニ生合テ、ウキ事ヲノミ見聞覽。寂光院ニアラマシカバヨソ「ニコソ」聞マシカ、

指ガ是程目ノ当リハ見聞ザラマシ」トサヘ思食ゾ、責ノ事ト覺テ哀レナル。是ニ付テモ朝夕ノ御行法不怠、御年六十八ト申シ貞応一年ノ春晚ニ、紫雲空ニタナビキ、音楽雲ニ聞ヘテ、臨終正念ニシテ、往生ノ素懷ヲ遂サセ給ニケリ。御骨ヲバ東山鷺尾ト云所ニ奉納ケルトゾ聞ヘシ。今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覺テ、目出ゾ聞ヘシ。昔ノ如、后妃ノ位ニテ渡セ給ハマシカバ、女性ノ御身トシテ、争カハ彼法性ノ常樂ヲ証ゼサセ給ベキト哀也。「源平ノ相論出來テ、災二合セマシニケルハ、偏ニ往生極樂之靈瑞ニテ有ケル物ヲ」トゾ、人申合ケル。サレバ日來ハ自利々他之行業、廻向ノ功力、冥途ニ到テ、御一類モ共離苦得樂、疑ヒ有ジ者哉。

波線部分は今まで殆ど注意されてこなかつたのであるが、延慶本はなぜ建礼門院が寂光院を離れて法住寺に移り、承久の変を契機に世をはかなんで往生したと記述するのか。四部合戦状本も同じく都の法勝寺に移つて承久の変を契機に往生を遂げたとするが、それは大原で付き添つていた尼女房たちが死に絶えたりしていなくなり、無住の寂光院が荒れ果てて野干天狗が荒らすようになったのに堪えかねてのこととし、延慶本のように寂光院の住まいを疎ましく思

二

第七話「唐土の人、馬牛の物憂ふる聞きて發心する事」は、慶政が中国で聞いた話である。卑しからぬ財産家の主人が秋の夜、銅つっていた馬牛が主人を恨む言葉を語るのを聞き、「財は身のあた」と家財を捨てて妻と娘と共に山麓の庵に住む。日に三つ作る笊器を娘に売らせて生活の資にしようとしたが三日間売れず、娘は道に落ちていた錢から笊器九つ分の代を取り、笊器を置いて帰る。話を聞いた父親は錢を返させる。娘が戻つてみると父母ともに頭を垂れて死んでいた。娘もその場で死んだという。飢えながら財産を捨てた志を貫こうとするプライド。その初志を理解していたはずの娘が、決して惡意からではなくそれを破つてしま

われるようになつたためとはしない。語り本や長門本・源平盛衰記は女院が大原で往生の素懐を遂げたと読める。女院に寂光院での修行を無化する心境の変化があつたとする延慶本の物語設定が『閑居友』下巻第八話のモチーフの延長線上の必然とは読めないだろうかというのが、本稿の問題提起である。そのためにはもう少し『閑居友』に寄り道をして、下巻第八話を挟む第七話と第九話のモチーフについて分析する必要がある。

まつたことに心傷つき、父母はプライドの保持を命と引き替えにした。そして娘も窮迫のあまりの行動が両親の志を無にするものであつたことに心を傷つけ、死を選んだのである。慶政はこの話を「あはれ尽しがたく侍る」としつつ、仏道修行もこのように澄んだ心を持つてすべきだ、三人とも菩薩になつたに違いないと評する。相変わらずのズレ。

第九話「宮腹の女房の不淨の姿を見する事」は、ある僧

都が宮腹の女房に恋心を抱いて、口説いたところ、里で逢おうという。夜出かけていつたところ、女はこの身の不淨なることを説き、灯りをともしてその様を見せる。「髪はそそけ上がりて、鬼などのやうにて、あでやかなりし顔も、青く、黄に変はりて、足なども、その色ともなくいぶせく汚くて、血とろどころ付きたる衣のあり香、まことに臭く、耐へがたきさま」。「さめざめと泣」いて述懐する女に、男もさめざめと泣いて「いみじき友に逢ひ奉りて、心をなん改め侍りぬる」と車に急いで乗つて返つたという。僧の恋心を妄念として改めさせるために女房はかの唐橋河原の死人にも紛う姿になつて見せたのだが、「我が身の成り行くにまかせ」た姿として自らを醜く見せる偽りの行為自分が女の心を二重に傷つけたのである。見られたくない姿をして見られなければならない我が身の定めのつたなさ、実

はそれが自身の偽らぬ姿であることに気づいた女房が「さめざめと泣」いたのは芝居ではなかつた。

『閑居友』の説話配列に連想性や連鎖性を見て取るのは大方の傾向であるが、その内容は研究者の間に振幅が大きい。わたくしなりに右のように二説話を把握して、その間に第八話を配置してみると、第八話は二説話のブリッジとして複層のモチーフ構造を認めることができる。

まずは文脈をたどりながら読みを展開したい。夜をこめて大原へ忍びの御幸をなした後白河法皇は年老いた尼に寺院の所在を尋ねる。上の山に花摘みに入つているとの答えに「いかでか、世を捨てといひながら、自らは」と不審がる法皇に対して、尼は次のように述べる。

家を出でさせ給はかりにては、いかでかさる御行ひも侍らざらむ。忉利天の億千歳の楽しみ、大梵天の深禪定の樂にもかやうの御行ひの力にて、逢はせ給はんとするには侍らずや。うき世を出でて佛の御国に生まれんと願はん人、いかでか、捨つとなれば、なほざりの事侍るべき。前の世にかかる御行ひのなかりける故にこそ、かゝる憂き目を御覧することにて侍らめ。

「出家し、天や仏土に願生しようとする以上は捨身の行は当然のこと。前世にかかる行がなかつたから憂き目を御覧

になつたのだ」という。武久堅氏の指摘するよう⁽⁷⁾に、尼が「[本人の往生]」が課題として設定されている女院の修行理解⁽⁸⁾をしていく点は後に続く法皇と女院との問答での女院の告白と齟齬しない。しかし、建礼門院の現在の境遇は戒行不足の応報という推測を後半に掘えた尼の言葉の論理は、この言葉全体を女院自身の心境とは相違した、他者としての常識的な因果応報に基づく外面向的批評を出るものではないものにしたてあげている。この尼は女院隱棲以前からこの庵の主だったのではないかとさえ思われるような、女院とは距離を置いた口ぶり。いうまでもなくこの尼は『平家物語』諸本で阿波の内侍に習合される原型だが、

『閑居友』の尼の造型⁽⁹⁾は、阿波の内侍について常に言われるような「女院の分身」ではなく、明らかに他者的存在といわなければならない。とまれ、まずはこの言葉が、法皇と臣下に嘗ての栄華とうつて変わった現在の女院の落魄の様の哀れさを他者的に認識させる方向へ誘導する役割を果たしていることに注意しなければならない。

尼の言葉に心情を方向付けられて法皇一行は女院の庵室を「あはれに悲しく」眺める。そして山の上から花籠と爪木を持って下りてきた尼姿の女院ら二人の変貌ぶりに法皇一行は「各々涙を流してあきれ（呆然とし）あ」う。世俗

的価値観。法皇一行は最後までこの境地から抜け出すことはない。一方女院も安徳帝を「今上」と呼び続ける精神世界に頑なに閉じこもつて〈語り〉により抜け出ることはなかつた。そして心傷つき、「涙に萎れつつ」還る法皇一行は、夜通し語る女院の述懐とは別の世界に住み続いたのである。法皇はいわば視点人物以上の何者でもない。慶政が「これはかの院の御あたりの事を記せる文に侍りき」と典拠資料を呈示したのを「建礼門院の周辺の消息を記した」(新古典大系)と解する通説に対して、語の使用例からの指摘だが「後白河法皇の御あたりの事を記せる文」と解した武久氏の指摘⁽¹⁰⁾はその意味で鋭い。

袖かき合わせて畏まり、法皇に向きあう女院に、法皇は「いかに、事に触れて便り無き御事も侍らんかし（何かにつけてご不便なことで）」と言葉を掛ける。実質的治天の君としての立場、世俗の発想からの同情、憐れみの言葉である。これに対して女院は「何かは便り無くも侘びしくも侍るべき。いみじき善知識にこそ侍れ」と、きつぱりと否定する。「善知識」の語は女院の夜を徹した長い語りの締めくくりの言葉として「かゝれば、これに過ぎたる善知識は無しとこそ覺ゆれ」と繰り返される。前の「善知識」は文脈の支えがないため判りづらい。強いて判断すれば、女

院が法皇の言葉に対して「便り無く侘びしき」境遇を反転させて善知識としていると反論したと解するのが妥当ということになる。締めくくりの繰り返しも、文脈から女院は現在の境遇を「身を捨、命を縮めて」自分の母（二位の尼）と子（今上＝安徳天皇）の後世を弔うことが自身往生の契機（善知識）だと認識していることが読みとれる。その意味で女院の心は法皇の世俗的発想からは対蹠的なところを志向している。ただそれは決して悟りすました心境ではなかった。「常に思ひ出で侍れば、涙もとどまらず。」身を捨て命を縮めて一人の後世を祈る建礼門院の心は、常に記憶に傷つけられ続けている。平家都落ちから壇浦の一門滅亡に至る敗北行を俱にし、二位の尼が何心もなき幼帝を抱いて入水する様をまのあたりにして、二位の尼から「女人は昔より殺すことなし。構へて残り留りて、いかなる様にても後の世を弔ひ給ふべし」と、死という安易な道をとることを禁じられ、生き続けて菩提を弔うつらい道を選択せざるを得なかつたこと。嘗ての女院国母に伴う名誉も財産も全てを自ら捨てて、生活にも窮する中でそのつらい志を貫こうとする女院の心は、世俗の権威と価値観を背負い、このわび住まいに決して悪意からではなく、むしろ意識もせずにそれを持ち込んだ法皇のことばに反論する自分の〈語

り〉によつて崩壊の危機を招いたのである。「いみじき善知識」「これに過ぎたる善知識は無し」と冒頭と同じ言葉が末尾に繰り返されるのは、その危機に崩れかけようとするわが心に言い聞かせる必死の防御の言葉であつた。

このように読んでみると、この説話が第七話と第九話のブリッジとしての位置を占めるにふさわしいモチーフを複層的に含んでいることが納得できるのである。見られたくない姿を見せざるを得なくなつた女主人公女院。〈語り〉によつてつむぎ出された、女院の主体＝プライド保持の努力と傷つく心との相克。それを顕在化させた、法皇の同情のことば（全くの善意からの引き金以上の役割を果していない）、そのことばを誘導した、女院の志を理解していない老尼の存在。そして女院の述懐の大部分を占めながら本話のテーマとして顕在していないので幼帝・二位の尼の清度のモチーフである。これらは同じ題材を扱つた延慶本『平家物語』でどのように継承され変質したのか。

三

『閑居友』と延慶本ほかの『平家物語』との関係についてははやくから諸説が入り乱れ、最近は『平家物語』諸本論の展開と草子『大原御幸』などの新出資料の紹介により、

更に混乱を極めている。ここでそれを整理する余裕はない。

本稿は武久堅氏が最近の注目すべき論考を挙げられて自説を展開された範囲の目配りでの物言いに止めたいたと思う。延慶本巻六末廿五「法皇小原へ御幸成ル事」が『閑居友』と内容構成を異にする最大の点は、『閑居友』の女院語りが先述のように先帝身投を主題材とする単純な構造であつたのに対し、その内容が包括的に増加し、佐伯真一氏のいう女院の三つの語りのうち「六道語り」と「安徳帝追憶の語り」の二段構造になつたことである。この二段構造は草子『大原御幸』にも見られ、他にも同文の多いことなどから、岡田三津子氏は延慶本と草子とは原『平家物語』とは別に作られた物語から派生したものと推測しておられる。氏の推測については別稿で論ずることとしたい。本稿で問題にするのは、まずは先述の『閑居友』に見られた諸モチーフが延慶本にどのように継承、変形されたかである。冗長になるが、『閑居友』と同様に延慶本の物語世界に即して読み解くことにしたい。

法皇が「忍ノ御幸」の名目を裏切るほどの公卿殿上人（架空の人名まで加えている）を供として訪れた女院の庵室は、『閑居友』の「昔の御あたり近き御宝物どもにはたとしへなき」侘び暮らしことはうつて変わり、もと女院の地

位にあつた者が極楽往生を願うにふさわしい調度の整つたさまに描かれる。しかし「忍ノ御幸」でさえこれほどの供人を従えるような厳めしい環境を日常の事としている法皇にとつては、それでさえも「四季ニ隨ヒ折ニ触レ」て風流を尽した嘗ての宮廷での女院の様と比較がされて、「コハ浅猿キ御住居カナト被思召テ、無^モ由此御有様ヲ來見ツル物哉ト、忍カネサセ給ヘル御氣色」になる。⁽¹⁴⁾この「浅猿キ御スマヒカナ」という感想は四回に増幅された法皇の女院への問い合わせの最初にも発せられて、以下述べる女院の決意を搖さぶる機能を果たす。その機能を読む者にあらかじめ予告し、世俗的価値観に浸りきつた法皇のすがたを植え付けるのが、大原に着いてまず女院の庵室の様に感懷を催すという構想なのである。『閑居友』では老尼の言葉に誘導されて女院の庵室の様に感懷を催した法皇だった。さすれば、これが『閑居友』にもまして法皇を世俗的価値観の持ち主として女院と対置・対決させる構造を明確にすることの順序転倒であることは言うまでもないであろう。

「人ヤ有」と尋ねる法皇の前に姿を現した尼は、女院が自ら花摘みに後の山に入っていることを告げ、「アキレ（呆然とする）サセ給ヘル御氣色」となつた法皇に対しても、「前世ニ戒善戒行薄クオワシケルニヤ、今カ、ル御身ニナ

ラセ給ヘリ。然バ来生之宿業ヲ兼テ悟リ給テ、捨身ノ行ヲ

修テ御スニコソ。サレバナニカ御痛候ベキ」と言い放つ。

『閑居友』と叙述の順を逆にすることにより、この尼の言葉には女院の先達かつ代弁者、阿波弁内侍の固有名詞に習合される者の言にふさわしい論理と態度とが与えられていく。『閑居友』の方向付けとは異なり、まずは女院と法皇との前哨戦がこの内侍問答の場面でなされるのである。

山から下りてきた女院は法皇と視線を合わせてしまい、立ちすくむ。

「十念ノ柴ノ戸ボソニハ、攝取ノ光明ヲ期シ、一念ノ窓ノ前ニハ、聖衆ノ来迎ヲコソ待ツルニ、思外ニ法皇ノ御幸ナリニケルヨ」ト思召ル、ヨリ、「哀、只、人

ニ不^レ被^レ知、何方ヘモ消失ヌベカリシ身ノ、人並々ニ憂世ニナガラヘテ、カ、ル有様ヲ目ノ当リ奉^レ見^{〔二〕}ヌルコソ浅猿ケレ。……

女院にとって法皇の御幸は一途の修行の心を乱すことであつた。落魄の身を、最も見られたくない法皇的眼前に曝す恥辱に呆然となる女院。しかし、女院はただちに思い返して立ち直る。

「コハ何事ゾ。今ハカク可思^一身ニアラズ。猶モ此世ニ執心ノアレバコソカクハ覺ラメ。サテハ仏ノ道ヲ傾^{〔ねが〕}」

ヒテムヤ」

主体的な決意をもつて女院は自分のやつれ果てた姿を上皇に見せようとしたというのである。このモチーフは国会本『大原御幸』にも長門本にもない。盛衰記にはある。この相違は諸本集成的な盛衰記を除いて、大原御幸の諸本の構想、すなわち佐伯氏のいう「女院の恨み語り」の有無と結びついている。屋代本は「此ノ有様ニテ見進ン事心憂悲クテ」立ちすくみ逡巡する女院を阿波の内侍が諫める構想になつてている。

「是程ニ厭^ヒ浮世^{キヲ}入^リ菩提道^{ノニ}給上ハ、何ノ御憚カ候へキ。早々御見參有テ、法王ヲ還御成シ進セサセ坐々セ。」

屋代本の阿波の内侍の言葉は延慶本のモチーフを継承しつつ、それを女院の主体的な決意としない。女院は高貴な女性にふさわしく主体性を表に出さない。だがその代弁者内侍尼をしてあからさまに法皇を寂光院なる閉鎖世界への闖入者と規定させている。覚一本も表現はやや穏やかだが基本的には同じである。このことは語り本の基本モチーフの構造を考える上で無視できないが、これ以上踏みこめば本稿から逸脱する。

決意にもかかわらず、女院は悟りすました者の平静な心

境にはなかつた。「誠ニ面ハユゲナル御氣ニテ、御顔打赤メテ渡セ給ケル御有様」。涙に咽ぶ女院の心に、法皇は揺さぶりを掛けた。

「カヽルタメシヲ目ノ当リ見奉リツルコソ中々クヤシケレ。」

「カクトモツヤヽ不奉知シテ、今マデ見マヒラセザリケル事、何計ノ御恨ヲカ残サセ給ツラムト、アサマシクコソ。」

女院はその揺さぶりに心を揺るがせられまいとする。

「カヽル憂身ニ成ヌル上ハ……」「数々ナラヌ身ノウサヲノミ思ヒ知テ、恨ヲナス事モ候ワズ。」しかし「サテモ誰事問マヒラスル人ニテ候グ」という法皇の言葉は、結局は女院に残つていた嘗てのプライドを呼び覚ましてしまう。

「其中ニ信隆ノ北方計ゾ折々ニ隨テ、思ワスル、事モナク、常々ハヲトヅレ來候。サテモ有シニハ、彼ガ

(はゞき)
ヲ可受トハ、懸テモ思ヨラザリシ物ヲ」。

藤原信隆は正三位修理大夫。既に治承三年十一月十七日に没している。その北方は女院と同じく平清盛の女（新古典大系『平家物語』下によれば同母妹）である。第六本『建札門院小原へ移給事』では女院は大原移住の際に冷泉大納言隆房の北方（同じく女院の妹）に輿を準備してもら

い、「大方モ常ニハコマヤカニ被訪申ケレバ、イトウ（憂）シト思召シ、此人々ノハグ、ミニテウキ世ニアルベシトコソ不寄思召シカ」と涙を流している。自分より低い身分の北方になつた妹に世事を頼らねばならないことは女院にとって恥辱に違ひない。法皇の問いかけは、かくして女院の心の揺さぶりに成功したかに見える。昔とうつて変わつて訪れる者もほとんど無い様を認識させられた女院は法皇とともに袖を絞るのである。しかし女院は一旦の動搖から再び立ち直る。

女院御涙ヲ押テ申サセ給ケルハ、「カヽル身ニ罷成事、一旦ノ歎ハ申ニ及ベドモ」「ニハ來生不退ノ悦アリ。其故ハ我五障三従ノ身ヲ乍受、已ニ积迦之遺弟ニ列リ、悲願證明ヲ憑テ三時ニ六根ヲ懺悔シ、一筋ニ今生ノ名利ヲ思捨て、九品ノ台ヲ願ヒ、一門之菩提ヲ祈ル。サレバ一念之窓ヲ開テ三尊ノ來迎ヲ期シ、三途ノトボソヲ閉テ出離之妙果ヲ願フ。是只一門別離ノ期ニ非ヤ。サレバ可然、善縁善知識トコソ思侍レ。」

『閑居友』と同じく、女院は法皇の憐れみに対し「可然、善縁善知識トコソ思侍レ」と応酬する。この語は『閑居友』と同じく女院の語りの末尾に繰り返される。後述するようにそこでは「善知識」と認識する契機を冒頭とは別

物に変えている。「今日ノ御幸コソ可然 善知識ト、ウレシク候へ」。ここでは冒頭の「善知識」が『閑居友』と同じ趣旨のことば、即ち「誰か事問マヒラスル」という法皇の憐れみ（というより延慶本では揺さぶりに変質しているのだが）対して帝ならびに平家一門との別離により「カ、ル身ニ罷成」つたことを反転させて「来生不退ノ悦」を得る機縁、「然るべき善縁善知識」と認識していると反論していることを確認しておきたい。女院は言葉を続ける。

今ハ心ニ叶ヒ侍ラバヤト思シ龍顔ニモオクレ奉リ、糸惜悲ト思奉リシ天子ニモ別レ、父モナク母モナキ、ツタナキ身ニナリヌル上ハ、ナジカハ人ヲモ恨、世ヲモ歎カシク思侍ベキ。其中ニモ此度生死ヲ可離事、思定テコソ候へ。其故ハ、此身ハ下界ニ乍住、六道ヲ経歷タル身ニ侍レバ、可歎ニモ非ズ。其ニ付テモ弥穢土ヲ厭フ志ノミ日ニ隨テ進候ニヤ。

女院は「可然 善縁善知識」と認識する基として自分の体験を意味づける。一つが孤独の身となつた故に、人を恨み世を嘆く、人との繋がりを気にする境遇から解放されたこと、一つが六道を経巡つたと称すべき苦楽の体験を重ねた故に生死の迷いの境地を超越するに到つたことである。ところが世俗の帝王的な価値観ないしは伝統的仏教の発想

から抜け出さない法皇は、第一の体験の意味づけそのものを疑う。疑うと言うより差別的女性觀を以て反発する。

「穢惡五障ノ女人ノ御身トシテ六道ヲ御覽ゼラレケルコソ、マメヤカニ心得ヘズ覚候ヘ。」

女院は院の挑発的言辞に「打咲^(わせ)セ給」う。精神的に法皇とは別次元の高みにいる女院は法皇の挑発を愚問として嘲笑したのである。あるいは苦笑したと言つていいのかかもしれない。延慶本が、女院を揺さぶりから立ち直つた姿として、法皇とは隔絶した境地にいる女院の心を明確に捉えていることに注意したい。他の諸本は盛衰記を除いてこの辞句を持たない。その盛衰記は佐伯氏のいわゆる女院の恨み語りを有することで構想の分裂をきたしているのである。法皇の挑発に対し女院は「只地獄モ極樂モ、我心ノ内ニ備ル事トコソ承リ候ヘ」と答え、法皇は「十戒ヲ十善ト申ケルハ此理ヲ申ケルニヤ」ト被仰^テ、弥哀打副テゾ被思食^{ケル}。俗世界の地平に留まる法皇と精神世界に高く飛翔する女院との落差。六道語りは、かくして必然的に女院の一方的行為となる。

四

伯真一氏らの論ずるところでもあり、それに言及すること
は本稿の意図から逸れる。本稿ではそれまでは滯ることな
く自らの体験を天・修羅・人・餓鬼・地獄によそえて一方
的に語ってきた女院が、畜生道を語ることを躊躇し、法皇
の懇請（揺さぶりと読める）により語り終えた後、「大方
一旦快樂之榮花ニ誇テ、永劫無窮之苦報ヲモ不覺」出離生
死之謀ヲモ不知。只明テモ晚テモ無墓「思ニノミホダサレ
テ過シ侍キ。是豈愚癡闇鈍之畜生道ニ迷ルニ非ヤ」ナムド、
御涙ヲ流テ申サセ給」うことに注目したい。先の五道で語
られた体験は女院が平家一家と共同してのものであつたの

に、これは他と隔絶した女院個人の、秘すべき内実であつ
た。それを語る女院の心が動搖しないはずがない。法皇は

女院に敢て語らせ動搖させることで一方的に押しまくら
れてきた自分の劣勢を逆転し、主導権を握つたのである。⁽¹⁶⁾

「同御歎ト申ナガラ、一方ナラズ、イカバカリノ御事
ヲノミ思召ラムト、御心中思遣マヒラスルコソ心苦ク

侍レ」

法皇の誘いに女院は乗せられてしまう。「何事モ先世ノ
宿業ニテ候ヘバ、強ニ不可歎候。」と先の語りと同じ態度
を保とうしながら、語り出した「安徳帝追憶の語り」の
声は苦悩に満ちたものになってしまったのである。冒頭に

語り出されたことば「ウセヌベカリシ檀浦トカヤニテ、母
ニモオクレ天子ニモ奉別キ。」に続いて、二位の尼に生き
延びて子先帝と母一位の尼の後世を弔うように命ぜられ、
その場でともに入水できなかつたという悔恨の思いが女院
を苦しめ続けていることが繰り返し語られる。

人間界ノ歎、親ニ後レ子ニ別ル、程ノ悲歎ヤハ侍ル
ベキ。サレドモ思歎ニハ露ノ命モ消ザリケルニヤ。今
日マデナガラヘ侍ルニ付テモ、身ナガラモツレナカリ
ケル有様哉ト、口惜モハヅカシクモ侍ベリ。……

「共ニ底ノミクヅト成ム」ト取付奉シヨ、二位殿、
「人ノ罪ヲバ、親ノ留リ子ノ残リテ訪ワヌカギリハ、
苦患遁レザムナル物ヲ。サレバ我身コソ今ハ空ク成ル
トモ、残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ、我等ガ苦患
ヲモ訪給ハザルベキ」トテ、引放テ出給……

海ニ飛入り給シ音計ゾカクカニ船底ニ聞ヘシカドモ、
消ハテ絶入ニシ心ノ内ナレバ、夢ニ夢ミル心地シテ、
貞ニモ覚ヘ不侍キ。世々生々ニモ其面影争カ忘レ侍ベ

キ。

それ故、女院は甲斐無き女人の身を嘆く涙にくれながら
弥陀の誓願を頼みとして一心に祈念する。

悲哉。只無甲斐、女ノ身ニ後世ノ苦ヲ思遣リ奉り、

六道四生、三途八難ノ業ヲダニ祓ヒ奉ラムト、夜ル昼
怠時ナク訪候ヘドモ、無明悪業之雲厚シテ、出離生死

之闇未踏ル、方ヲ不知。トテモカクテモ不絶、身ニソ

ウ物トテハ、只悲ノ涙計、寤寐モ祈念スル事トテハ、

「一念弥陀仏、即滅無量罪、現受無比樂、後生清淨土、

西方弥陀、信心影像、一念十念、當得往生」、是等ノ

御誓之外ハ心ニ懸タノメル方侍ラズ。

かくして女院は貧女の一燈の説話を手かがりにして、國母の地位から全てを失った対蹠的な「衰ヘタル」現在の身になつたことを道心保持の最も優れた契機として意味づけ、自分の捨身の行を諸仏が納受するに違いないことを確信していると表明するのである。

貧女ガ一灯ヲ捧テ仏ヲ奉供養ケムモ、今コソ思知
ラレ侍レ。サリトモ三世諸仏モナドカ納受シ給ハザル
ベキトコソ、憑ク覚ヘ侍レ。其中ニモ道心サメガタク
侍ルハ、國母ノ衰ヘタルニマサレルハ候ハザリケルニ
ヤ。

女院は自分の確信を裏付ける現象として、新中納言知盛から龍宮に転生した平家一門が龍王の眷属として日に三時の苦患を受ける身を済度してほしいと告げたとの夢想を得たことを挙げて、次のように述べる。

訪レムトテコソ夢ニモミヘ侍ラメト思ヘバ、法花經ヲヨミ、弥陀ノ宝号ヲ唱テ訪候ヘバ、サリトモ一業ハナドカ免ザラムト、憑シクコソ侍レ。サレバ、是ニマサレル菩提ノ勤アラジトコソ覚ヘ侍レ。
一門救濟のために法華經を読誦し念佛を唱える、天台のいわゆる「朝題目、夕念佛」の行。平家一門済度のためのこの行が自分の罪業を一つは滅してくれるにちがいない、それを「国母の衰ヘタル」すがた、捨身の行としてなすこと、これこそ自分のために最も優れた「菩提ノ勤」であると思われると、女院は本朝震旦の先例を列挙して述べる。しかし、それは言表すればするほど逆に女院自身の心を傷つけることとなつた。「來方行末ノ事共サマヽニカキクドカセ給、泣く申サセ給」という語り手のことばは女院の心中の葛藤を表現し得て過不足ない。それ故女院の語りの結びの言葉は自らの心の崩壊を食い止めるべく、法皇に忽々の還御を促す性急な言葉遣いとなつてゐる。
女院ハ、「今日ハナニトナキ事共申ナグサミ侍リヌ。是マデ申ヅバケ候ヘバ、様ヲカヘ世ヲ遁タラムカラニ、イツシカケシカラヌ口ノ聞サマヨトハ思食レ候ラメドモ、物ヲハヂツ、ムモ様ニコソヨリ候ヘ。カ、ル有侍ノ身ノ危サハ、菩提ノサマタゲニ成ト承レバ、辱ヲワ

スレテ申候也。其ニ付テモ、今日ノ御幸コソ可然「善知識ト、ウレシク候へ。送日「重夜」トモ不可^レ申尽。既ニ日クレ侍リヌ。トク（還御ナルベキ）ヨシ申サセ給。

「善知識」を『閑居友』の結びから同じく価値の転倒をなすべく取り込みながら、延慶本が「これ（筆者注、「今上の後世を弔う業」をさす）とは似て非なる「後白河法皇」への「嘆キ」「申シ」を実現させた法皇の御幸を以て女院の「善知識」とするという、大胆な独創^⑯をなしたという武久氏の指摘^⑰は全くそのとおりなのだが、「其ニ付テモ」という、前からの文脈を断ち切る表現には女院が法皇の「善知識」たる御幸により「衰ヘタル」我が身の様を傷心を以て確認させられたと深層では認識していると読めるのである。すなわち女院は上皇に誘導されてこの語りを「申し尽ス」結果が主体を崩壊させ「本人の往生」から遠ざかることになることを本能的に察知し、防御姿勢を構えたのではないか。法皇還御後、女院は持仏堂に入り、天子ならびに平家一門の成等正覚と出離生死を祈念して、念佛を高声に唱え涙に咽ぶ。その激しさは大原入御の際佛前で同じ趣旨の祈念を成し、そのまま絶入した時のこと想起させる。しかし、今度の場合には、その時のひたすら先帝と

二位の尼、親族の往生を思い詰めて大原入御が実現した際の感情の迥りとは異なり、我が心が法皇の干渉によりくずれようとする今の状況においてその行動が主体を保持すべく縋り付ける唯一の拠り處であつたのである。「法皇ノ御幸ヲ御ラムゼラル、ニ付テモ、昔ヲ思出ツ、悲マセ給ヘル御有様、サコソ思召ラメト、ヨソノ袂マデモ可朽^レゾ覚ヘシ。」という延慶本の語り手の解説がそれを裏付ける。その意味で、確かに延慶本は『閑居友』の「善知識」のさす対象をすり替えたのだが、本稿第二節で指摘した下巻第八話の「女院の自己救済の努力と傷つく心との相克」というモチーフをしつかりと継承して、法皇の介入との対決構造を顕在化するかたちに展開させ、最終的には往生の願いを語る女院が我が心の危うさにおののくことに物語を収斂させていることも疑いないのである。その意味で『閑居友』と同じく延慶本においても幼帝や二位尼、ひいては平家一門の救済のモチーフはやはり大原御幸の正面きつたテーマに浮上していない。

そして法皇御幸によって傷ついた女院の心は結局回復しなかつた。本稿第一節終わりに引いた延慶本廿六の記述、「女院ハ法皇還御之後、サスガ都ノミ恋ク被思食^レテ、日來思食入サセ給タリツル寂光院ノ御スマヒモ、カレド^レニ

思食ナリテ」法性寺に移り、「カスカナル御有様ニテ住」むうちに承久の変に朝廷方が敗北した姿に平家一門の最期を思い合わせて心崩れ、それが往生の契機となつたという叙述はかくして物語的必然と考えることができる。苦し第一節に引用した延慶本廿六の最後の傍線部に見える語り手の批評は、女院の菩薩行により平家一門の離苦得樂が「疑ヒ有ジ者哉」とする辞句を添えてそうした女院の心弱さを救済すべく、女院を道心触発の原点に立ち戻らせた記述なのである。

枚数が大幅に超過した。草子『大原御幸』と長門本、語り本への継承と変質は稿を改めねばならない。この論考と並行する読みとして、次のことが挙げられる。すなわち、佐伯氏のいう「恨み言の語り」は長門本（ないしはその原型）の段階で作られたものであろうし、『大原御幸』は構想的には延慶本の原型から派生し、長門本への過渡的な存在と位置づけられるのではないか、語り本、特に屋代本は原延慶本の構想に基づいたために一門救済のモチーフの扱いに無理が生じているのではないかということである。これらの読みについても諸先賢の叱正を仰げれば幸甚である。

（未完）

註

① 慶政が献上する対象については東一条院立子ほかの諸説がある（新日本古典文学大系『宝物集・閑居友・比良山古人文託』所収閑居友解説〈小島孝之〉に整理されている）が、任期制助手の北城氏に感謝する次第である。

② 藤本徳明「閑居友」不淨觀説話の成立（説話・物語論集2、昭和四八年一〇月、『中世仏教説話論』（昭和五二年笠間書院）所収）

③ 小林保治「人間、この不淨なるもの——『閑居友』にみる不淨の思想——」（日本の説話3 中世1 昭和四八年一月 東京美術、『説話集の方』（平成四年笠間書院）所収）ほか。

④ 久保田淳「恨み深き女生きながら鬼になること——『閑居友』試論——」（文学三五卷八号、昭和四二年八月、諸書に再録）ほか。

新古典大系の脚注で小島孝之氏は「従者の船に乗り込んで、髪を切つて置いてくる行為には、顕基に対する当つけの雰囲気も感じとれそだが、編者はその点には意を払わず、顕

基が往生人だという前提と整合性を調べようというまとめ方をしている」と批評している。表層と内容のモチーフのずれに着目している点では本稿と共通するが、視座を異なる。

⑤ 建礼門院徳子の崩じた日付は『大日本史料』が『皇代曆』・『女院次第』等により建保元年（一二二三）十二月十三日として以来、それが標準となっているが、記載資料により

文治四年（一八八）から貞応三年（一二三四）までの幅がある。逝去の日時も場所についても信頼すべき当時の資料が見つかっていない。史実か否かは確かめようがないが『平家物語』の当初の構想は、延慶本や四部本のようになつてゐる

とするのである。角田文衛氏は四部合戦状本と延慶本の記事が真実を語っていると推論し、四部本によつて女院は大原

から法勝寺へ遷御して貞応二年（一二三三）三月下旬に鶴尾で崩御したと推測している（建礼門院の後半生 日本書紀 306、昭和四八年一月）が、論証過程に不安を残す。

⑥ 小林保治「『閑居友』序説（二）」（早稲田大学教育学部学術研究18、昭和四三年一二月、『説話集の方法』所収）

藤本徳明「『閑居友』の構造について」（説話・物語論集1、昭和四七年一二月、『中世仏教説話論』所収）

木下資一「『閑居友』（説話の講座5『説話集の世界II——中世——』平成五年勉誠社）

これらについては小島孝之氏の批評（新古典大系解説）がある。

⑦ 「壇ノ浦合戦後の女院物語の生成——『閑居友』と延慶本

平家物語の関係・再検討——」（軍記物語の窓第一集）、平

成九年和泉書院、後に『平家物語発生考』（平成一年とうふう）所収）193頁。

⑧ 佐伯真一「女院の三つの語り——建礼門院説話論——」（古文学の流域）、平成八年新典社）125頁。

⑨ 武久堅「壇ノ浦合戦後の女院物語の形成」（注⑦既出）

⑩ 「平家物語発生の時と場（その二）——生成平家物語試論——」（軍記と語り物28、平成四年三月、『平家物語発生考』

第一篇所収）

⑪ 小島孝之氏は本話の主題を老尼の言葉の本稿引用部分の前に求め、「前話の龐居士と靈照親娘の行為も、世を捨てたからには徹底的に現世の欲望を排除するというものであった。その点に説話の連続性が存するのではないか」（新古典大系脚注）と考えておられる。オーソドックスな見解といえよう。氏は第九話は上巻末尾三話と同じく不淨觀説話として配置されていると考え、第八話との連続性については言及されない。

⑫ 岡田三津子「国会図書館蔵『大原御幸』（軍記と語り物25、平成元年三月）

岡田三津子「建礼門院六道巡りの物語——国会本『大原御幸』の草子と延慶本『平家物語』との比較を通じて——」軍記と語り物27、平成三年三月

池田敬子「女院に課せられたもの——灌頂卷六道譚考——」（国語国文六三卷三号、平成六年三月、『軍記と室町考』）

〈平成一三年清文堂〉所収）

佐伯真一「女院の三つの語り——建礼門院説話論——」（注⑧既出）

なお、本稿は『閑居友』の記事を延慶本より先行する形を有しているとする前提のもとに立論しているが、両者に直接の書承関係はなかったと考える。ただし、その考証は本稿の目的から外れるので記さない。

⑬ 「壇ノ浦合戦後の女院物語の生成」（注⑦既出）

⑭ 武久氏注⑦の論考195頁。

⑮ 佐伯真一「畜生道」語りと『宝物集』（『延慶本平家物語考証三』平成六年新典社）

佐伯真一「建礼門院説話統論——中世の女性説話として——」（『軍記物語の窓』第一集）

名波弘彰「建礼門院説話群における龍畜成仏と灌頂をめぐつて」（中世文学38、平成元年六月）
小番 達「建礼門院関連記事の考察——『万法甚深最頂仏心法要』との関わりから」（『古代中世文学論考』第六集、平成二三年一〇月新典社）

⑯ したがつてわたくしは法皇の役割に関する大津雄一氏の読み（『後白河法皇の涙——建礼門院の物語をめぐつて——』日本文学53、平成一〇年五月）には視座を異にして賛成しない。

⑰ 「壇ノ浦合戦後の女院物語の形成」（注⑦既出）197頁。

⑱ 武久氏は注⑦の論考で「延慶本の女院の「一門の靈魂救

濟」の悲願は、それ 자체を前面に押し出す積極性に支えられて課題化されたものではなく、むしろ法皇に半ば強制されて開陳する「歎キ」が前提にあり、「先帝喪失の歎き」を前面に押し出す志向性が濃厚であると解される。」と述べる。平家一門の亡魂救濟が前面に押し出されていないことを指摘した点で鋭い論旨であるが、氏が女院の「歎キ」を前面に押し出された点で、女院の主体が崩壊の危機にさらされたことを延慶本のテーマと読む本稿とは趣旨が一致しない。

（本学教授 国文学）

〈キーワード〉 延慶本平家物語、建礼門院、後白河法皇